

## ライプニッツの「実体概念」

——教育学的人間像の見地から——

下 村 啓 子

### 序

ライプニッツの哲学的見解を学ぶときに重要なことは、（彼の比較的体系づけられた晩年の著作である『モナドロジー』ではおそらく1696年頃に確立されたと思われる「モナド」という名称に統一されているが）この「モナド」に与えられている彼の「実体概念」を理解することである。それは、ライプニッツの哲学的思索において第一哲学即ち存在としての存在を問う場合の基本が、現実的な個別的存在の原理は何かということであって、そのさい最も基本的な存在として考えられたものがこのモナドと呼ばれた「実体」に他ならなかったからである。したがってこのモナドという名称のもとに構成された概念内容を明らかにすることからは、又ライプニッツの人間存在に関する基本的理解も示されることになる。

ライプニッツ自身、1694年の『第一哲学の改善と実体概念』<sup>1)</sup> という小論で次のように語っている。第一哲学が当時においても「求められ〔まだ見つからずに〕いるものの中にとどまっている」<sup>2)</sup> と述べた後、デカルトを批判して「……その（誤りの）原因は実体の本性一般を理解しなかったところにある」<sup>3)</sup> とし、更に「……その（私＝ライプニッツの）実体概念は極めて豊富な内容を含みそこから帰結として種々の根本的真理，神，精神，物体の本性に関する真理，その一部は知られてはいても十分証明されていないもの，又一部は今まで知られずにいるが将来大いに他の諸学に資すべきものが出て来る……」<sup>4)</sup> と語っている。

実体の本性を究めることから、ライプニッツは形而上学的な原理を導き出すに到った。即ちそれは「何物も十分な理由なしには起こらない」<sup>6)</sup>との原理に基づき、「無ではなく何かがあるのは何故か」<sup>6)</sup>、言い換えれば「ものごとがこのように存在していて、別のようには存在しないのは何故か」<sup>7)</sup>という命題の理由を示すものである。

ここでは『モナドロジー』を基本的な題材として、その他幾つかの著作<sup>8)</sup>を参考としつつ、ライプニッツの思索に沿ってその「実体概念」を明らかにし、それによって導き出された形而上学的な原理を考察することにおいて、彼の人間理解の構図をも明らかにしようとするものである。

## I 「実体」の名称の推移

「実体」が最終的に「モナド」と呼ばれるに到るまでのそれぞれの著作における名称を記してみる。これによってライプニッツが「実体」をどのような概念によって組織しようとしたかが少なからず明らかになるだろう。

1686年の『形而上学叙説』(以下『叙説』)では「実体的形相」the substantial forms, 「個体的実体」the individual substances, 1694年の『第一哲学の改善と実体概念』では「能動的力」vis activa——エンテレケイアを含む——となっている。1695年の『実体の本性及び実体の交通並びに精神物体間に存する結合についての新説』(以下『新説』)においては「原始的力」the primitive forces, 「実体的な統一或いは本当の統一」the real units or genuine units, 「実体的形相」, 「第一エンテレケイア」the first entelechies, 「実体的統一」the substantial units, 「形而上学的点」the metaphysical points, 等々と名づけられ、1714年の『理性に基づく自然及び恩恵の原理』、『モナドロジー』に到って「モナド」に統一される。

ここで『叙説』において見られる 'individual' との用法は、ライプニッツの実体概念形成において見落せない点であると思われる。それは単なる現実存在の原理ではなくして、いわば現実的な個別的存在の原理を問うことが基本であったライプニッツの見解に対応している。

## II 個物（個体）としての実体

『新説』の中でライプニッツが自らの思索のあとを振り返っている箇所<sup>9)</sup>に依れば、その哲学形成にあたって主要な契機をなしたのはアリストテレスとデカルトであることがわかる。そこではアリストテレスからはスコラ哲学を通じて「実体的形相」を<sup>10)</sup>、デカルトからは機械論的思惟（コギトの原理、思惟する実体としての精神と延長を有する実体としての物質）を学んだと述べている。

ライプニッツの哲学的思索の根本的な動機は次の言葉から知ることができる。「哲学においても明白な証明によって何かしっくりしたものを立てる可能性（方法）があるような気がした。」<sup>11)</sup>「形而上学にはかえって数学におけるよりも多くの光明と確実性がとが必要だと思う。……その（光明と確実性との）助けによりあたかもユークリッド的方法に依るが如く計算するような具合に問題を解くことができ……明晰性を保つのである。」<sup>12)</sup>ここには思想を構成する究極的な要素を見出すことをもって動機としている点がかがえる。つまり、究極的な要素の可能な組み合わせによって、既に知られている真理のみならず、まだ知られてはいない真理をも明らかにすることができると考えていたのである。数学的思惟を念頭に置き、それを原理として形而上学を組織せんとしたライプニッツの意図が明らかである。（ただしこの企てはあくまで可能的結合であって、可能性は直ちに現実性となるわけではなく、したがって現実存在の原理を問うには又別の理由が必要とならざるを得ない。）この経過は、他方力学的分野において「自然法則の理由を見出すために機械的原理（力学の原理）そのものを深く究めようとす」<sup>13)</sup>るにあたり、延長を有する物質のうちにはその原理がないことに気づいたとして「機械的に自然を説明する」<sup>14)</sup>仕方を批判するに到ったことと対応している。存在に実在性を与えるためには、力学の原理においても形而上学的な「力」の概念が必要となったように、「実在的な生きて活動している点」the real and animating points<sup>15)</sup>としての「実体

の原子」the atoms of substance<sup>16)</sup>にたよらなければならないとするのである。

ここにおいて登場するのが「実体的形相」であり「個体的実体」である。ライブニッツは再びアリストテレスに戻り、次のような実体の概念に到達する。「実体的形相」とは、可能に先立つ現実としての形相こそが実体を実体たらしめるということである。実体は述語に対するところの主語であって、もはや述語とはならずあらゆる述語を内に含む主語として、類概念ではなくして個物（個体）の概念である。この個物たる実体、即ち「個体的実体」が最も基本的な存在であり、あらゆる存在は実体とその属性より成る、としている。この「個物」という概念は、「モナド」が部分をもたない単純な実体であるということに生かされている。

### Ⅲ 実体の本性

「実体的形相」をとりいれたライブニッツは、しかしながら実体の本性は「力」にあるとする。「そのさい（実体的形相を呼び戻すとき）それを理解できるものとし、その（正当な）使用とこれまでの誤用とを区別するようにしなければならなかった」<sup>17)</sup>と言っているのは、この「形相」が広がりをも、したがって形をももたないものとして理解されねばならず、それゆえイマジネーションに依拠しそれを満足させるような一切の概念を排すと同時に、又「……自然の個々の特定な問題を解決するために、これを用いてはならない」<sup>18)</sup>ものと考えられていることを指す。「実体的形相」は、「我々が精神についてもっている概念にしたがって理解されなければならない」<sup>19)</sup>とするのも同様である。「力」を本性とする個体的実体こそ、実在性の原理であるところの「本当の統一、我々の中の所謂自我に応ずる統一」<sup>20)</sup>であり、真理の基礎であって、その後「モナド」と呼ばれるに到る実体の基本概念なのである。

精神は、ノエシスとしての作用の側面と同時にノエマとしての様々の意識対象とを内包し、且つこの意識として常にこれらを統一づける自我でも

ある。ライプニッツにしたがえば、表現・表出を本質とするところの「一にして多」「多にして一」なるものであって、「多」は自我に内在するのではなく自我のかかる表現表出作用によって産出されるものである。

そこで、実体（モノイド）は便宜的に言うならば、まず第一に個体或いは「(多を含む) 一」として広がりをも形をももたない単純な実体であり、したがって部分をもたず全く分割されない。統一的な 'point of view' の 'point' と言い換えられている。第二に、各々のモノイドは又このモノイドとしてそれによって他のモノイドと区別されるべき内的な性質をもっているはずである。ライプニッツはこの点について、①表象（一にして多を含み或いは表わす作用）と②欲求（一つの表象から他の表象への移行を起こす）という二つの内的性質及び内的作用をモノイドに与えている。「モノイドには窓がない」<sup>21)</sup>として他のモノイドによるいかなる変化も蒙らないにもかかわらず、モノイドに変化するものの detail 即ち状態の変化が起こるのは、かかる表象と表象の変化とに依るのである。この表象の変化というのは、モノイドが神ならぬ存在（被造物）である故に制限を有し、自らが述語として含んでいるすべてを判明に表象し得ないことによって、ひとつの表象にとどまることなく更に判明な表象へと移行せざるを得ないことに他ならない。この変化は連続的に且つ自然に行なわれるので、新たな表象はその前の表象からのみ生じると同時に、次の表象をも内に含むこととなる。「現在は過去を背負い未来をはらむ。」<sup>22)</sup>この意味においてモノイドは、完全に自足的な実体としてエンテレケイアを含む「非物体的（広がりをも形をももたない）自動体」と呼ばれる。このエンテレケイアは、ライプニッツによって可能的な実現能力と実現作用との中間にあたる傾向力・努力、即ち実体が自己を実現し完成していく力<sup>23)</sup>として説明されている。又他方、形而上学的点として、数学的点（全く不可分ではあるが実在性をもたず単なる様相にすぎない点）とは異なり、物理的点（単に外観においてのみ不可分と考えられる点）とも鋭く区別されて、「不可分な（厳密な）実在的点」 the indivisible [exact] and real points<sup>24)</sup>と説明されている。

#### IV 実体の相互関係

ところで、モナドの表現・表出作用という本性は他のモナドとの関係を仮定しているものでもある。したがってモナドの本性を究めることから、おのずとモナド相互間の関係に言及せざるを得なくなる。

ライプニッツに依れば、モナド間にはそれぞれの完全性にしたがって差異が設けられている。この完全性というのは表現の仕方即ち表象の判明度に依るものであるが、判明な表象とは「他のものの中に起こることの理由を示すことができる」<sup>26)</sup>ものであり、逆に判明でない（混雑している）表象とは「そのものの中に起こることの理由が他のものの中で判明に表象されている」<sup>26)</sup>ものを指す。ライプニッツは、表象の判明度に応じて三つの段階にモナドを区分している<sup>27)</sup>。モナド間にはかかる仕方で適応（対応）があり、そしてこの対応は物理的な作用（直接作用）に依るのではなく観念上における作用に依ると考えられている。したがって、このような観念的な仕方で作用に依る適応を生み出すには、何かの媒介が必要となってくる。

ライプニッツはこの点について次のように説明する。彼が「事実の真理のうちにも十分な理由がなければならぬ」と言うとき、それは真の存在にはそれが実在するに足る十分な理由が必要であるということである。言い換えれば「ものごとがこのように存在していて、別のようには存在しないのは何故か」という問いを満たす理由を考えているのである。ライプニッツにおいては、この理由は神をおいて他にはない。何故なら、モナドのそれぞれが自発性に基づき内発的に自己完成を目指してより判明な表象に向かうと同時に、他のモナドすべてとの適応関係のうちにあるとき、それらをそのように為さしめる理由は、この（状態の）変化と関係の外に、それらを越えたものに求めなければならないからである。ところでモナドは創造された実体であるからこの理由は創造主たる神に、即ち必然的に存在して創造されない実体のうちに求められなければならないことになる。

この適応関係は、「共可能性 compossibility」という概念から理解できる。内に矛盾を含まない限りでの存在はまだ可能的な存在にすぎず、それらが各々自己の実現を求める中で、他の実現されるものと適合するところの存在（共可能的な存在）だけが現実的な存在となるのである。これは「適合の原理」と言われる。

この適合の原理は又「調和の原理」とも呼ばれ、「予定調和説」として完成される。モナドとモナドとの適応関係は、（次に挙げる引用箇所では心身関係として述べられているが）「神が初めに……精神又は他のあらゆる実在的統一を創造したさい、その精神に生ずるすべてのことがこの精神そのものから見ると完全な自発性に依っていながら、しかも外界のものと完全な適合を保ちつつ精神そのものの奥底から出てくるような具合にしておいた。」<sup>28)</sup>という内容を与えられるのである。神は適合を理由として、共可能的な存在の実現にあたっては最善なるものをあてたのである。

この適応は創造されたモナドすべてに行きわたるものであるから、「単純な実体はそれぞれ他のすべての実体を表出する関係をもち、したがって宇宙の生きた鏡となっている。」<sup>29)</sup>「精神そのものの内に起こるこの内的な表象は、精神自身の根本的な構造によって……起こるものにちがいな」<sup>30)</sup>く、「実体の各々は自分流儀に一定の視点から宇宙全体を厳密に表現し」<sup>31)</sup>「あたかもそこに神とその精神としか存在しないかのようになっているので、これらすべての実体の間には完全な一致をみることになる。」<sup>32)</sup>モナドは制限されつつ混雑にはあるが、無限に向かい宇宙全体を映しているのである。

## V 物体の本性と心身関係

最後に、ライプニッツの思想形成の見地からみれば最も主要な位置を占める心身関係にふれてみたいと思う。心身関係とそれに先立つ物体の本性についての考察とは、これまでの本稿の記述にしたがえば、実体と実体関係との概念を適応することである。

ライブニッツは真に実在するものは単純な実体以外になく、物体はこの単純な実体の集合体として、自己のうちに自己の有する実在性の根拠をもたず、それを単純な実体にかけている合成体と考えている。「しっかりした根拠をもつ現象」にすぎないというのはこの意味である。ところで、この単純な実体において既に明らかになったように、実体の間にはそれぞれが有する表象の判明度によって差異が設けられていた。実体相互の関係は、より判明な表象をもつモナドが混雑した表象をもつモナドに対して能動的に作用すること、或いは前者は支配的・優勢な dominant モナドであるとして、対応の関係として述べられていた。したがって、物体は或るモナド（ほぼ意識的モナドである精神が考えられている）が優勢なモナドとなっている、或る混雑した表象をもつモナドとして説明されることになる。

物体の本性は、「合成体は単純な実体を象徴する」<sup>83)</sup>として、単純な実体（モナド）との符合において説明されるのである。ただ単純な実体と物体との間には真の実在と現象との区別があることから、一方においてモナドはそれ自身空間的規定をもたず（空間はライブニッツの規定に依れば同時存在の秩序にすぎないから）、むしろ空間の前提となっている。これに対して他方では、物体は部分から成るものとして充実空間の中に位置づけられる。物体の概念は、この充実空間概念のうちで考えることが必要である。

物体（身体）は、①宇宙を表象し、②活動性を有する生きた存在として自然的な<sup>84)</sup>自動体である。③物体（身体）を構成する各分枝も、更にそれらの諸部分も同様に①②の本性をもつ。物体はあらゆる部分において生きた機械であり、全宇宙を表象しているのである。④物体（身体）はその諸分枝の交替によって絶えざる流動そのものであり、この変化はいわば状態の変化と言えることから、生物体の「発生」・「死」はあくまで変態とみなすべきである。生命の起原は創造の時にあり、あらかじめ形成されて極微動物のうちに存在する。

このようにして、精神と身体とはモナド間の適応関係にしたがって予定



調和によって、各々独立でありながら一致する。精神は *final causes* の法則にしたがい、他方身体は *efficient causes* の法則にしたがって、相互に作用し合うことはないにもかかわらず、あたかもそうであるかのように調和しているのである。

注

- 1) ライプニッツ『单子論』（河野与一訳, 岩波文庫）に収録されている。pp.305—9.
- 2) *ibid.*, p. 305.
- 3) *ibid.*, p. 306.
- 4) *ibid.*, p. 307.
- 5) Leibniz, “Principles of Nature and of Grace, founded on Reason” trans. by R. Latta. §7. pp. 414—5.  
 なおこの著作については、岩波文庫版、河野与一訳『单子論』に収録されている「理性に基づく自然及び恩恵の原理」も参照した。
- 6) *ibid.*
- 7) *ibid.*
- 8) 既に挙げた1)及び5)の外に、R. Latta 訳 “Monadology”, “Metaphysics” と “New System of the Nature of Substances and of the Communication between them, as well as the Union there is between Soul and Body” を取りあげた。  
 なおこれら三著については、他と同様に河野与一訳の『形而上学叙説』と「单子論」及び「実体の本性及び実体の交通並びに精神物体間に存する結合についての新説」（後二者は『单子論』所収）を参照した。
- 9) “New System” §2—3. pp. 299—300.
- 10) アリストテレス自身には「実体的形相」という表現はない。
- 11) “New System” p. 299.
- 12) 「第一哲学の改善と実体概念」 pp. 306—7.
- 13) “New System” §2. pp. 299—300.
- 14) *ibid.*
- 15) 16) 17) 18) 19) *ibid.*, §3. p. 301.
- 20) *ibid.*, §11. p. 311.
- 21) “Monadology” §7. p. 219.
- 22) *ibid.*, §22. p. 231

- 23) 「第一哲学の改善と実体概念」 p 307.
- 24) “New System” §11. p. 311.
- 25) “Monadology” §52. p. 247.
- 26) *ibid.*
- 27) まず単に表象をもっているだけのモナドは第一の無意識的なモナドでありエンテレケイアであるのに対して、表象に記憶を伴う次の段階では表象は知覚となり、そのモナドは意識的モナドとして soul (精神) となる。最後の最も判明度の高い段階は、単なる精神 (動物的精神) ではなく理性的精神として自己意識的な自我となり、表象は統覚となる。
- 28) “New System” §14. p. 314.
- 29) “Monadology” §56. p. 248.
- 30) “New System” §14. p. 313.
- 31) 32) *ibid.*
- 33) “Monadology” §61. p. 250—1.
- 34) これはモナドが「非物体的自動体」であることに対してのことである。

## The Concept of Substance of Leibniz

—from the viewpoint of educational human image—

Keiko Shimomura

When we study the philosophical view of Leibniz, it is important to understand 'the concept of substance' which is organized under the name of 'Monad'. His basic problem about the First Philosophy, or Being as Being, was 'what is the principle of realistic individual existences?' and he came to think this substance called Monad as the most basic being.

Leibniz, who had learned 'the substantial form' through Scholasticism from Aristotle, considered 'substance as an individual' or 'individual substance' as the most basic being and 'force' as its nature. The substance is, first, simple and indivisible, which has neither extension nor shape as an individual or one (a united 'point' of 'point of view'). Second, it has the inner character and activity (symbol and desire) which differentiates a Monad from the other. Therefore the change of the state of the substance depends not on other Monads but on the symbol and its change of a Monad itself, because Monad is a perfect and self-satisfying substance, a 'non-bodily automat'.

Moreover there are differences among Monads according to its own perfection (clearness of symbol). Each Monad is bound for clearer symbol, spontaneously aiming at self-accomplishment, but at the same time each is well adapted to all other Monads. We can understand this adapted-relation by the concept of 'compossibility': among possible beings which pursue their self-realization, it is only compossible beings adapted to other realized ones that

become realistic. This is called 'the principle of adaptation or harmony'. With another great principle which affirms that nothing takes place without sufficient reason, this is the answer to Leibniz's metaphysical proposition: why does something exist rather than nothing? or why things should exist thus and not otherwise?